
夢色冒険譚～ココロのファンタジー～

NACONO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢色冒険譚（ココロのファンタジー）

【Nコード】

N2381Y

【作者名】

NACONO

【あらすじ】

外界から閉ざされた花の精霊の国、百華国。ここに暮らす少女長月栞奈は、外の世界を見てみたいと日々思っていた。ある日彼女は国に流れついた兄弟ロヴィーノとフェリシアーノを助ける。彼等と出会ったことで栞奈は、ある目的で旅をしたいという兄弟とその仲間達の冒険に巻き込まれていくのだった。フェリシアーノの持つ魔法のスケッチブック、そしてそれを埋め尽くした時に行けるとされる、天空の箱庭『フィオーネル』の存在。三人とその仲間の旅路には、何が待っているのか？そしてどこに辿り着くのか？ あら

すじ変更しました

始まりはすぐそこに

美しい花々が溢れ、海に囲まれた街フローラ。ここに高名な絵描きの老人が住んでいました。

彼には双子の孫があり、兄は強くて勇気がありました。弟は泣き虫で怖がりだけど優しい少年でした。双子なのにあまり似ていません。

兄はロヴィーノ、弟はフェリシアーノという名前です。

フェリシアーノは幼い時から祖父の真似をして絵を描き始め、めきめきと腕を上げていきました。そんな彼に老人は熱心に絵を教え、フェリシアーノもそんな老人が大好きでした。

ある時、老人は言いました。

「この街には綺麗な物が沢山ある。だから俺も今まで街の姿を描き続けてきた。どれもいい出来だった。……でも、俺はまだ満足なんかしてねえぞ」

「どうして？」

お爺ちゃんの絵を誉める人は沢山いるじゃない、とフェリシアーノは反論します。

「俺はな、もっと色々な場所を見たい。この街の外の景色を描きたいんだ。確かにヨーゼフの奴から話は聞くが、実際に行ってみてえな……」

ヨーゼフというのは、いつも老人の絵を買ってくれのおじさんのこと。色々な国を回って物を売っているそうです。勿論フェリシアーノの祖父の絵も色々な街で売っています。

「ねえ、それに僕もついて行っていい？」

「ああ勿論さ。こんな可愛い孫を置いていけないだろう？」

老人はそう言って、孫の頭を撫でました。撫でられたフェリシアーノもすぐ嬉しそうです。

老人はその後も絵を描くのに忙しく、旅の実現は難しそうでした。それでもフェリシアーノは、いつか祖父と旅ができる日を楽しみにしていました。

しかし、その日が来ることはありませんでした。

「惜しい人を亡くしたものだ……」

真っ赤な夕日が光る丘で、ヨーゼフはそう呟きました。彼の視線の先には、『ヴァルガス』と刻まれた墓標がありました。

フェリシアーノとロヴィーノの祖父で、高名な画家でもあったアントニウス・ヴァルガスは今朝、息を引き取りました。先程葬儀が終わったばかりです。アントニウスはいつも絵を描く時に腰かけていた椅子で亡くなっており、彼の前には完成した絵があったそうです。きっと死ぬ前に仕事を終えて満足したのだろうと、周りの人々は言っていました。彼は安らかな笑顔で眠っていたそうです。

そして兄弟は、ヨーゼフの家に引き取られることになりました。母は兄弟を産んですぐに亡くなっていましたし、父は金遣いの荒さが原因で随分前にヴァルガス家を勘当されていました。頼れるような親戚もおらず、そんな二人を哀れんだヨーゼフが、兄弟を自分の家に迎えることにしたのでした。

「お爺ちゃん……！」

フェリシアーノはただ泣き続けていました。大好きだった祖父とはもう会うことも話すことも、一緒に絵を描くこともできないのです。そして、一緒に世界を回って旅をするという約束も、永遠に叶うことはなくなっただけでした。

どうして悲しいことは続けて起こるのだろう、墓の前で立ち尽くしていたロヴィーノは、そんなことを考えていました。彼にもまた、果たされなかった約束があったのです。

ロヴィーノは、いつも一人でした。

口が悪く反抗的な彼は、周りから悪い子と思われていたのです。本当は負けず嫌いで自分の気持ちを言葉にするのが苦手なだけなのですが。

祖父のことも本当は弟と同じくらい大好きで尊敬しているのですが、やはり素直になれません。さらに弟の方が自分よりも可愛がられていると感じていたので、一層反抗的になってしまっていました。

元々絵が上手で素直なフェリシアーノに対して劣等感を抱いていたのも、原因の一つだったかもしれせん。

そんな彼にも一人だけ、心を許せる存在がいました。

葬儀の一週間ほど前、港の近くを歩いていたロヴィーノは、一人の少年に出会いました。彼はロヴィーノよりいくらか年上のように、綺麗な緑色の瞳と明るい茶色の髪をしていました。

話を聞くと、少年は海の向こうの国から来たようです。今日は家族と一緒にフローラに観光に来たのだとか。

「なあなあ、君なんて言うん？よかったらこの街案内してくれへん？」

「急に何だよコノヤロー」

その後少年があまりにもしつこく頼んでくるので、ロヴィーノは渋々彼の案内を引き受けたのです。

何かを見たり聞いたりするたびに、少年は目を輝かせ、声を上げました。そしてロヴィーノにもたくさん話を聞いてきました。

ロヴィーノは最初、そんな彼に不快感を抱きましたが、少年があまりにも楽しそうにするので、少しずつですがロヴィーノも楽しくなってきました。

ようやくロヴィーノが少年と過ごすのが楽しくなってきた時には、もう日が暮れていました。少年はもう、両親の待つ宿へ帰らなければならなくなりました。フローラに彼がいるのは今日一日だけで、明日の朝にはもう、船に乗って家に帰るそうです。

「今日は楽しかったで！」

そう笑って、立ち去ろうとする少年を、気づけばロヴィーノは呼び止めていました。

「もう、帰っちまうのかよ……あれだけ俺のこと振り回しといて、勝手に帰るなんて許さねえんだからな……」

行かないで。もっと俺といてよ。楽しい時間だったんだから。本当はこんなことが言いたいの、冷たい言葉しか吐けない自分が嫌になっちゃいます。少年は戸惑った顔をしていましたが、またすぐに明るい笑顔を浮かべて言いました。

「来年も来る。そしたら真っ先にロヴィーノ訪ねてく。約束や」

「本当だな？嘘ついたら許さねえぞチクショー！！」

「本当や。だから安心してな」

少年はそう言って、ロヴィーノの前から立ち去って行きました。太陽のように明るい笑顔が印象的だった彼にまた会いたいと、ロヴィーノは強く願いました。こんな可愛げのない自分に、あんなに優しく接してくれる人は初めてだったのです。

そして、次に会えた時は、もう少し素直になろうとも思っていました。

しかし、その約束が果たされることはありませんでした。

その夜、フローラ発の観光船、少年とその家族が乗るといつていた

船が大波に飲まれたという報せが届きました。
ロヴィーノはさらに次の日に、その報せを受け取り、一人で泣き続けました。

外から閉ざされた、たくさんの種類の花が咲き誇る国。ここに、一人の少女が住んでいました。

否、彼女は本当は『少女』ではありません。でもここでは、少女としておきましょう。

また、彼女は人間でもありません。スズランの花の精です。そして、見た目はまだまだ若いですが、こう見えてかなりの時を生きています。

この国に住むのは皆、彼女のような花の精たちです。その花にちなんだ魔法を使うことができ、それぞれ一つ、何かの仕事を持っています。その仕事を生業として一生を終える、それが精たちの生き方でした。

だから、外に出て過ごすなどという選択肢は、あるはずがないのです。

しかし少女は、外に出てみたいと思っていました。家族のようにいつも一緒に友達もたくさんいて、一年中穏やかな気候のため物質的に豊かな生活も送れていたけれど、何か物足りないのです。外にはどんな国があるのか、この目で見てみたい。それが少女の願いでした。

叶わない願いだとわかっていても。

果たされなかった約束に苦しむ兄弟と、叶わない願いを抱く少女。
この三人が出会った時、壮大な物語が幕を開けるのですが、この時
は誰がそれを想像できたでしょう。

出会いと別れ、人と人の絆……あらゆる人々を巻き込んだ三人の物
語の始まりは、すぐそこに迫っています。

もともと、物語が始まるのは、もう少し先のお話ですが。

陽だまりの日々

葬儀から一晩明けて、フェリシアーノとロヴィーノは見知らぬ屋敷の中にいました。ここがヨーゼフの家である大貿易会社『エーデルシュタイン商会』です。

「君達の兄弟になる子を紹介しよう。大丈夫、二人のことはちゃんと話してあるよ」

ヨーゼフはそう言って、兄弟を案内しました。お屋敷の中にはたくさん綺麗な花が活けてあり、赤いじゅうたんが敷かれています。窓も部屋の扉も、落ち着いた色調でシンプルではあるけれど、とても綺麗なものでした。

フェリシアーノとロヴィーノは、それらに目を奪われてしまいました。

そして二人はある部屋に迎え入れられました。赤いじゅうたんが敷かれた部屋の中にはぎっしりと本の詰まった大きな本棚とグラランドピアノ、人が二、三人は寝られそうな大きいベッド、そして勉強机とテーブルが一つずつあります。やはりどれも落ち着いた色遣いでシンプルなものです。

「ローデリヒ、いらっしやい。それからエリザベータも」

ヨーゼフの言葉に反応して、誰かがこちらに駆けてきます。黒髪の少年と栗色の髪を後ろでまとめた少女でした。二人は兄弟よりも年上らしく、フェリシアーノとロヴィーノを見て首をかしげます。

「父上、このお二人が？」

少年が尋ねました。どうやら彼は、ヨーゼフの息子のようです。

「ああ。ロヴィーノ、そしてフェリシアーノ・ヴァルガス君だよ。

あのヴァルガス画伯のお孫さんさ」

「ええ！？あのアントニウス・ヴァルガスの？」

ヨーゼフの言葉に、少女が興奮します。

「そうさ。二人も挨拶しなさい」

ヨゼフに促され、少年と少女は兄弟に向き直りました。

「初めまして。ローデリヒ・エーデルシュタインと申します。お会いできて光栄です」

「俺はエリザベータ・ヘーデルヴァーリだ。よろしくな」

「エリザベータ、こういう時は『私』と言うのが正しいですよ？」少女、エリザベータを少年、ローデリヒが注意します。

「今日からこの二人も、エーデルシュタイン家の一員だ。仲良くするんだぞ」

「はい！！」

ヨゼフの言葉に、ローデリヒとエリザベータは、元気よく笑って答えました。

その日から、四人の兄弟のような生活が始まりました。

ローデリヒは頭が良くて音楽や美術が得意だったので、色々なことを兄弟に教えてくれました。

フェリシアーノは大喜びですがロヴィーノはそういった話についていけずにふて腐れることもありました。その時はエリザベータが彼と一緒に家の中や外で遊んでくれます。ヘーデルヴァーリ家は代々エーデルシュタイン家の護衛を務めているらしく、エリザベータもなかなか力があります。そんな彼女と遊んでいるのですから、ロヴィーノも日に日に力をつけ、強くなっていきました。

一方のフェリシアーノも、ローデリヒから知識を教えてもらうだけでなく一緒に絵を描いたりピアノを弾かせてもらったりもしたので、ますます芸術の才能が開いていきました。

兄弟がエーデルシュタイン家に引き取られて十日ほど経ち、ヴァルガス兄弟はある兄弟に出会いました。彼等は『バイルシュミット酒造』という大きな造酒会社の息子で、酒を買ってくれるエーデルシュタイン商会にはよく出入りしているそうです。

兄はギルベルト・バイルシュミットといって、とにかく自由奔放な少年です。銀色の髪と、熟した果実のような赤い瞳をしています。弟はルートヴィツヒ・バイルシュミットといって、真面目で自分にも他人にも厳しい少年です。金色の髪と、澄んだ水色の瞳をしています。

ヴァルガス兄弟とバイルシュミット兄弟は、何回もあっているうちに自然と仲良くなりました。フェリシアーノは二人をギル、ルートと呼んで慕い、ロヴィーノも少しずつですが二人と打ち解けていきました。

それにローデリヒとエリザベータも加わり、ギルベルトとルートヴィツヒが来た日は五人で一緒に遊びました。喧嘩をすることもかなりありましたが、五人で遊んでいる時間は、とても楽しいものでした。

そんな日々を繰り返しているうちに、十年以上の月日が流れていきました。

そして六人も大人になりました。

ローデリヒはエーデルシュタイン商会の後継ぎとして、芸術の才能と教養はそのままに、威厳と落ち着きのある青年になりました。

エリザベータは強さはそのままに、おしとやかな女性となりました。ギルベルトは剣術の腕が上がりましたが、自由奔放なところはそのままでした。

ルートヴィツヒは真面目な性格はそのままに、武術を身につけた逞しい青年になりました。

ロヴィーノは体術が強くなりましたが、素直になれない性格はそのままでした。

フェリシアーノは力は弱いけれど、優しさと芸術の才能を持った青

年になりました。

そして、物語の始まりの時も、迫っていました。
。

***キャラクター整理 その1* (前書き)**

まずはここまででてきた、メイン六人とその周辺の人たちの紹介。

キャラクター整理 その1

オリキャラいます

年齢かなりオリジナルです

本家様の設定を引っ張ってきている部分もあります

フェリシアーノ・ヴァルガス（19）

高名な画家の祖父を持つロヴィーノの双子の弟。エーデルシュタイン家から援助を得ており、現在美大の一年生。絵や音楽の才能に長けている。楽観的で細かいことを気にしない性格だがちょっと(?)泣き虫で怖がり。祖父が亡くなってから、ヨーゼフの屋敷で暮らす。「一緒に世界の色々な国に行く」という幼い頃の祖父との約束をいまだ忘れられずにいる。

ロヴィーノ・ヴァルガス（19）

フェリシアーノの双子の兄。祖父や弟とは違い芸術分野は苦手です。フェリシアーノに劣等感を抱いている。弟と同じくエーデルシュタイン家の援助で現在は航海学校の一年生。性格は負けず嫌いで口が悪く、意地っ張りだが実は寂しがり屋。幼い頃に一日だけ過ごした少年を忘れられず、その思い出に縛られている。フェリシアーノとは何かと言い争いするが、本当は大事な弟だと思っている。

ローデリヒ・エーデルシュタイン（25）

エーデルシュタイン商会の現当主。幼い頃のヴァルガス兄弟の保護者代わりでもあった。学業や芸術面で非常に優れており、落ち着きのある性格でプライドは結構高い。振る舞いはいたって上品。昔は弱くエリザベータに助けられてばかりだったが、現在はかなり改善された模様。恋愛等には慣れていないのか、エリザベータの気持ち

に気づきつつも上手く応えられずにいる。

エリザベータ・ヘーデルヴァーリ(23)

代々エーデルシュタイン家の護衛を務める家系に生まれた、ローデリヒの護衛兼助手で会社の経営にも手を貸す。今はおしとやかな性格になったが、幼い頃の活発な性格や優れた身体能力は健在。時々男っぽい行動や言動が出る。ヴァルガス兄弟やルートヴィヒを弟のように可愛がっている。ギルベルトは幼なじみで喧嘩友達。ローデリヒに主従関係以上のほのかな想いを抱く。

ギルベルト・バイルシュミット(23)

エーデルシュタイン商会の取引先、『バイルシュミット酒造』の息子。自由奔放な性格で跡取りの自覚が薄い。現在は跡取り見習いとして実家の仕事を手伝っているが、暇があればローデリヒたちの所に顔を出す。剣術が得意で、エリザベータは昔からよき好敵手。勉強は嫌いだが高頭が悪いのではなく、戦略を考えさせるとその才能を發揮する。弟が少し怖い。

ルートヴィツヒ・バイルシュミット(21)

通称ルートノルツツ。ギルベルトの弟。兄とは対照的に真面目で曲がったことが大嫌いな性格。自分にも他人にも厳しい。跡取りとなる兄を色々な面で手伝いたいと、現在大学で勉強中。趣味は読書。兄と違い得意なのは銃術だが、鍛えられた肉体を持つため体術もかなりのもの。ローデリヒや兄には振り回され、ヴァルガス兄弟には手を焼く苦勞人。

ヨーゼフ・エーデルシュタイン(50)

ローデリヒの父でエーデルシュタイン商会の前当主。アントニウスの絵を高く評価していて、よく彼の絵を買い付けに来ていた。彼の死後はその孫であったロヴィーノとフェリシアーノを引き取って育

てる。最近当主の座を息子に譲り、現在隠居中。

アントニウス・ヴァルガス【ローマ帝国】

故人。ロヴェーノとフェリシアーノの祖父で、高名な画家だった。色々な国をこの目で見たいという望みをかなえられないまま亡くなった。

***キャラクター整理 その1* (後書き)**

次からついに物語が始まる、はずです。

流れ着いた兄弟（前書き）

いよいよ本題に入ります。いきなり長くなりました。

流れ着いた兄弟

二メートルはあるスズランの花。その根本に一人の少女が座って何かをしている。

少女は白地に緑の木の葉模様が入った浴衣を着て、腰のあたりまでの黒髪と濁りなき黒い瞳をしていた。

「菜奈、そろそろお昼ですよ。休憩にしましょう」

すると黒い短髪に眼鏡をかけ、淡い緑のチャイナ服を着た長身の青年が、少女に声をかけた。

「あ、^{ルシン}緑星さん」

菜奈と呼ばれた少女は、何かを作っていた手を止め、立ち上がった。

「皆集まっていますから、さあ」

「そうですね。でもこれを完成させてしまいたいです。あとスズランに水をやらないと」

緑星は、では待っていますよ、と菜奈に言い残して立ち去る。そして彼女は『これ』を仕上げてどこかへ駆けていく。

その場所で、大きな出会いが待っているとも知らずに。

菜奈は水辺に来ると、持ってきた小さな水瓶を浸す。瓶が水で満たされ、立ち去ろうとした時、彼女は何かを見つけた。

「見馴れないものですね……：外の世界のものでしょうか？」

菜奈が手に取ったのは、黒くて細長いもの。中は空洞で、脚か手を入れられそうだ。これが『外の世界』でいう長靴というものだが、彼女はそれを知らない。

だが、再び視線を上げた彼女はとんでもないものを見つけた。

「あれは！」

茶色の短髪をした青年が一人、下半身を水に浸して岩にもたれかか

っていたのだ。

「しつかりしてください！」

栞奈はすぐさま青年に駆け寄り声をかけたが、彼は苦しそうな声を出しただけだった。

「息はあるようですね……白光の術！」

栞奈の手から白い光が放たれ、青年はようやく目を開けて言葉を発した。

「ここ、は……？」

「お気付きになられたんですね」

安堵の笑みを浮かべる栞奈だが、青年の表情は晴れない。

「に、兄ちゃん、は……？兄ちゃんはどこ？」

「もう一人いるのですか！？」

その言葉を聞いた栞奈は青年を陸に連れて行き、彼の兄を探すべく再び水辺へ走っていった。

少し深い所まで入り、転覆し壊れた小舟に覆いかぶさる人を発見した。彼が青年の兄だろう。髪の色が少し濃い所を除けば、青年にそっくりだった。

「意識がないですね……」

急いで陸に彼を運んだが、目を覚まさない。

「少し強めにやりますか……白光の術・改！！」

栞奈は力をこめ、白い光を兄に降り注がせる。少しすると、彼は急に咳込んで水を吐き出した。その後彼女は先程までいた花園の方へ走り、大声を出した。

「梅花！^{メイファ}緑星さん！」

少し経つと、栞奈は緑星、そして梅花と呼んだ少女と共に戻ってきた。その少女は黒い長髪に赤い花の髪飾りをつけており、長い巻き毛が伸びている。丈が短めの赤いチャイナ服の下にはいた白いロングスカートが揺れた。

「これが『外』の人？随分ぼろぼろネ……特にこつちが」

梅花の視線の先には、水を吐いたものの意識を取り戻さない兄がいた。弟の方も意識こそあるがかなり苦しそうだ。

「誰……？」

「大丈夫。悪いようにはしませんから。梅花、緑星さん、後はお願ひします。私では応急措置しか出来ません」

心配そうな弟に、栞奈が笑いかける。

「いきますよ、慈悲の光！」

「これ飲むといいヨ」

すると緑星は兄に何か魔法をかけ、梅花は弟に赤い小瓶を手渡した。すると、

「……はっ!？」

「何か元気が湧いてきた！」

兄は急に起き上がり、弟の顔には生気が戻っていく。

「お前、誰だ？」

目を覚ました兄は困惑した表情を浮かべた。

「私は長月栞奈と申します。貴方がたは？」

「俺はロヴィーノ・ヴァルガスだ。こつちは弟の……」

「フェリシアーノ・ヴァルガスっていうんだ！よろしくね」

すっかり元気になった弟、フェリシアーノが笑いかけてくる。

「ロヴィーノさんにフェリシアーノさんですね。覚えました」

「ところで、栞奈だっけ？ここはどこ？」

「見たことない場所だぞコノヤロー」

「ここはですね……」

栞奈がフェリシアーノとロヴィーノの問いに答えようとした時だった。

「ここは百華国、外からは閉ざされた花の精霊の国ある」

どこからか声が響き、誰かがこちらへ近づいてくる。

「老師！」センセ

「ミスター……」

「耀様？」ヤオ

梅花と緑星、そして栞奈が振り返った先には、赤いチャイナ服を身に着け、長い黒髪を一つに纏めた男が立っていた。

「客人とは久しいあるな。我は王耀ワシヤオ、この国の王にして精霊の長ある」

さらに後ろからもう一人、和服を着て黒い短髪と黒い瞳をした青年が歩いてくる。

「そして、私は本田菊。副長を務めております」

菊はそう言って、兄弟に礼をした。

流れ着いた兄弟（後書き）

ここでオリ人名の解説。

メイファ
梅花＝台湾

ルシン
緑星＝マカオ

ご察しの通り、この章ではアジアメンツが登場します。

花咲き誇る国（前書き）

他のアジアメンツもここで登場。オリ人名がいっぱいあります。

花咲き誇る国

「まあ、治るまでゆっくりしていくよろし。栞奈、それから緑星と梅花、二人を頼むあるよ」

「いいのですか？もしかすると外からの密偵かもしれないのに！」

菊は焦ったように王耀に忠告するが、

「落ち着くある菊。心配しなくてもこいつらからそんな匂いはしない、長年の勘あるよ」

王耀は特に慌てる様子もなく答えた。そして菊を促し、二人でその場を立ち去って行く。

しかし去り際に菊が見せたどこか冷たい表情が、兄弟の心に引っ掛かった。

それから栞奈は、ロヴィーノとフェリシアーノに百華国のことをたくさん話した。

「耀様のおっしゃった通り、この国に住むのは皆花の精霊です。そして皆、一生何かの仕事をすることを決められています」

「じゃあお前も精霊なのか!？」

「もう仕事してるの?」

ロヴィーノもフェリシアーノも身を乗り出して聞く。

「私はスズランの精です。そして仕事ですが、こんな物を作っています」

栞奈が手に乗せて二人に見せたのは、白く小さな球状のものだった。内部が淡い橙色に光っている。兄弟はそれが何か分からず黙り込んでいたが、

「これはスズランの灯りヨ。普段の生活だけじゃなく、お祭りの飾りとか色々役に立ってるネ」

梅花が解説してくれる。

「ふーん。ということはお前らも精霊か？」

ロヴィーノが緑星と梅花の方へ向き直った。

「当たり前ネ！私は紅梅花、梅の花の精だヨ！」

「私は鏡緑星、百合の花の精霊でございます」

「そしてお二人は、精霊たちの薬箱のような存在なのです」

「薬箱？」

栞奈の言葉に兄弟が首をかしげていると、梅花と緑星が説明を始めた。

「私、これ作るのが仕事。梅の花から抽出したこの甘酸っぱい液、

元気の湧く薬になるネ。さつきは直接飲ませたけど、薄めても効果

抜群ヨ」

「そして私は、魔法を使って医師の仕事をしております」

「魔法使えるの！？」

フェリシアーノが魔法という言葉に反応した。

「はい。精霊は皆、その花に因んだ魔法を使うことができます。私は百合から治癒の力を授かっているのです」

緑星がそれに答える。

「私も梅の花から、癒しの力を貰ってるんだヨ」

「私もスズランの加護で、守りや癒しの力を使えます」

緑星さんほど強くないですけど、と梅花と栞奈が口を揃えて言う。

「そうなんだ〜何か色々分かったよ」

フェリシアーノは満足そうに笑うが、隣のロヴィーノはまだ何か聞きたそうな顔だ。

「あのよ……お前たちって、回復とかの魔法しか使えないのか？普通魔法っていうと、でかい攻撃技とか使うんじゃないのか？」

ロヴィーノの言葉に、栞奈と梅花、緑星が考えるような表情をする。

「まあ、使えないことはないですが」

「私達は回復や守りが専門ヨ」

「攻撃なら、ミスターや菊さん、勇洙とかの方が得意……」

「本当だぜ！外の奴なんだぜ！」

するとどこからか、元気のいい声が響いてきた。

「勇洙、来たの？」

「噂をすれば、ですか」

栞奈は驚き、緑星は苦笑する。そこにいたのは、黒い短髪で水色のチヨゴリを着た青年。所々髪が外側にはね、巻き毛がある。どうやら彼は勇洙というらしい。

さらに勇洙の後ろからも、人影がいくつか現れた。

「うわ、外の人見るの初めてのな？」

「あまり私達と変わらないな……」

一人は茶色の短髪で朱色のチャイナ服を身につけた少年、もう一人は王耀のように長い黒髪を纏めて緑色のアオザイを着た少女だった。

「この人たちも皆精霊？」

フェリシアーノが栞奈に尋ねると、真っ先に勇洙が反応した。

「勿論なんだぜ。俺は任勇洙、ムクゲの花の精霊なんだぜ！」

「俺は朱燎海、よろしく的な。あと因みにホウセンカの精つす」

「私はファン・ツエイ・リャン、リャンで構わない。蓮の花の精をやっている」

勇洙と、そして燎海とリャンの自己紹介が終わった時だった。

「大丈夫ですよ、そんなに警戒しなくても」

また別の声が出て、誰かがこちらに来る。所々逆立った黒い短髪に眼鏡をかけ、白地に金の刺繍入りの軍服を着た長身の青年だった。

そして彼は険しい表情をする白い狼や象を従えている。

「外の方ですか。私はリクシーム・ワドバンゲイン、皆さんからはリクと呼ばれています。彼等は私の友達です」

「と、友達!？」

穏やかな笑みを浮かべるリクだが、フェリシアーノとロヴィーノは彼の傍の動物達に少し怯えていた。

「リクは霊獣の世話をする仕事を与えられているのですよ。だからすっかり、霊獣達と意志疎通が出来るようになったのです」

緑星が説明すると、リクはまだ警戒しているらしい霊獣達をそつと

撫でた。

「だから平気ですって。この方達は、悪いことしたりしません。怖がらないで」

すると霊獣達の表情が少しずつ緩んでいく。

「それより、勇洙達は仕事に戻らなくていいのですか？耀さん怒ってましたよ」

リクの口から出た言葉に、勇洙と燎海、そしてリヤンの表情が変わる。

「やばいんだぜ……兄貴が怒ると面倒なんだぜ」

「早く戻るう的な？」

「そうするか」

そして三人は、その場を離れて仕事に戻って行った。

「何か、騒がしくなりましたね。すみません」

栞奈は苦笑しながら兄弟に言った。気づけばこの場にいるのは、兄弟と彼女だけになっていた。

「全然大丈夫だよ。賑やかな友達がたくさんいるんだね」

フェリシアーノは笑って答える。

「確かに、一緒にいて退屈はしらないですね。そうそう、今度は私から質問していいですか？さっきまで私が話してばかりだったので」

「いいよー、と兄弟が了承すると、栞奈はある質問をした。

「どうして、この国に流れ着いたのですか？」

花咲き誇る国（後書き）

またまたオリ人名の解説。

リヤオハイ
燎海〓香港

リヤン〓ベトナム

リク〓タイ

因みにタイさんの人名は、名は「微笑み」、姓は「手綱を引く」という意味のタイ語をあてたつもり。でも発音記号がうまく読めなかったので、合ってる自信は限りなくゼロに近いです。

あと余談ですが、服の描写がムズかったです。

二つの約束（前書き）

菜奈とマカロニ兄弟がいろいろな会話する、それだけです。

二つの約束

栞奈の問いに、二人は少し戸惑っていた。自分は悪いことを聞いたかもしれないと栞奈が思った時、フェリシアーノが口を開く。

「冒険がしたかったんだ」

栞奈はその言葉をすぐには理解できなかった。

「冒険とは？」

「俺、昔爺ちゃんと約束したんだ。一緒に世界の色々な場所を旅するって。もう叶わないけどね」

「どうしてですか？」

「爺ちゃんはもう……死んだんだ、十年も前に。有名な絵描きで、俺にも絵を覚えてくれたんだよ。そして言ってた、色々な国や街をこの目で見てみたいって……」

そう語る彼の表情だけでなく、声も暗くなっていく。

「すみません、失礼なことを……」

「ううん大丈夫。でね、爺ちゃんは死んだけど、色々な世界を見ていって気持ちはずっとあつたんだよ。だけどヨーゼフさんもローデリヒさんも、まだ早いつて行かせてくれなくてさ……この間、俺は美大、兄ちゃんは航海学校に合格して、気晴らしってことでようやく許されたんだ」

「途中で魔物に襲われて、結局だめになつたけどな」

「でも、その代わりに百華国に着いたんだからいいじゃん」

ロヴィーノは残念そうな顔で付け加えるが、フェリシアーノはどこか楽しそうだ。

「だからあんなことになつていたんですね……つまりフェリシアーノさんは、お祖父様の遺志を継ぎたいと？」

「うーん、そんな大きなことじゃないけど……色々な所に行って、そこの景色を絵に残せたらなつて思うよ」

そう笑って答えるフェリシアーノにつられて、栞奈も笑ってしまう。
「素敵な夢ですね。ところでロヴィーノさんは？」

栞奈が今度はロヴィーノの方を見ると、こんな返事が返ってきた。

「アイツの住んでいた街を、見たかった……」

フェリシアーノと栞奈は、彼の真意を読み取れずに戸惑った。

「ガキの頃、一日だけ一緒に過ごした奴がいたんだ。名前は知らないけど……海の向こうから来て、俺に街の案内を頼んできた。そして別れの時、来年また会おうって約束した」

そこまで話して、ロヴィーノは俯いてしまう。栞奈が心配して声をかけると、彼は少し震える声で再び言葉を発した。

「でも……叶わなかったんだ。その次の日に、そいつの家族が乗っていた船が沈んだって聞いて……だからせめて、いつか海を渡ってそいつの住んでいた街を見に行きたかった。そのために航海学校にも入ったんだ……」

それを聞き、栞奈だけでなくフェリシアーノも悲しそうな顔をした。気づけばロヴィーノは涙を流している。

「ロヴィーノさんは、その方が好きだったんですね……」

栞奈は優しく微笑んで彼の肩に手をかけた。そして泣き止むまで、ロヴィーノをそっと抱き締めていた。

「ごめんな、空気悪くしちゃって……他に聞きたいことあるか？ 答えやってもいいぞ」

泣き止んだロヴィーノは目をこすりながら、栞奈に再び語りかけた。「いいえ、お気になさらず。他にですか、そうですね……あ、聞き忘れてました。お二人はどこから来たんですか？」

栞奈はロヴィーノが落ち着いたことに安心し、もう一つ聞いた。するとフェリシアーノが答える。

「俺達はね、フローラって街から来たんだ。ここ程じゃないけど花

がたくさん咲いてて、海に囲まれて暖かくて、いい所だよ」

「聞いただけで想像できます。綺麗な街ですね」

「随分嬉しそうな顔するんだなお前」

「え？」

ロヴィーノに指摘されて初めて、栞奈は自分の表情が今まで以上に明るくなっているのに気付いた。

二つの約束（後書き）

何か説明臭いかもしれないですね。

少女の願い

確かにそうだと、と栞奈は思った。さつきから兄弟の話を聞いていて、自分の胸の鼓動は高鳴っていたのだ。

「外の世界の話を聞くのって、楽しいんですよ。私、生まれてから今まで、国から出たことがないんです。生まれた時から菊様に固く禁じられてきました。外の世界に住む者達は皆、残虐で利己的で危険だからと」

「菊つてあの、無表情の黒髪か？ここの長と一緒にいた……随分な言われ様だな」

「別に皆がそうじゃないのにな。ルートもギルも、ローデリヒさんもエリザさんもいい人なだけだ」

栞奈の言葉に対してロヴィーノは不快そうな表情をし、フェリシアーノは小さく溜め息をつく。

「で、お前はどなんんだ？」

「何がですか？」

「栞奈は、外に出たいとか思わないのか？」

栞奈にそう問い掛けるロヴィーノの表情は真剣だった。

「それは……」

栞奈はしばし黙り込み、それから寂しそうに言った。

「本当は、外に出たいです。この目で外の世界を見たいんです」

栞奈はだが、すぐに自虐的に笑って続けた。

「でもこんなの、おかしいですよ。私には仲間も住む場所もあって、不自由などないというのに……わざわざ外に出たいなんて、周りが聞いたら笑っちゃいますよね」

「そんなの……」

「何もおかしいことはねえよ」

フェリシアーノが言い終わらないうちに、ロヴィーノが続けた。

「見たことない物を見たいと思うのは、人間、いや精霊でも当然に決まってる」

「そうだよ。俺だって、今までフローラから出なくても生きてこれたけど、やっぱり外を見たいって思うもん。爺ちゃんとの約束っていうのもあるけどさ……」

「フェリシアーノさんも、フローラから出たことがないんですか？」

「ヴェ？そういうえばそうだね、兄ちゃん」

「確かに」

「私達、同じだったんですね」

栞奈は思わず笑ってしまった。そして、

「お二人は、フェリシアーノさんとロヴィーノさんは、優しい方ですね」

そう言っただけで兄弟に柔らかな笑みを向ける。

それから栞奈は、何かを考えるように黙り込んで、空を見上げていた。兄弟が不安になって話しかけると、

「あの、私、お二人にお願いがあるんです」

少し真剣な表情をして、二人の方に向き直った。

「何なに？俺、可愛い女の子の言うことなら、何でも聞いてあげようよ」
フェリシアーノが陽気に答えると、栞奈はさらに表情を引き締める。

「私を……お二人の冒険に、連れて行ってくれませんか？」

少女の願い（後書き）

最近書くシーン、会話多いな……

決意の一步（前書き）

間が空いちゃってすみませんでした。一気に二話載せます。

決意の一步

栞奈の言葉に、ロヴィーノとフェリシアーノは次の言葉を紡げず
いた。

「やっぱり、駄目でしょうか」

「いや、そんなことねえよ！」

「うん、全然大丈夫だよ。栞奈も俺達と冒険しよう！一緒に『フイ
オーネル』に行こうよ！！」

「本当ですか！？嬉しいです……って、フイオーネル？」

表情を明るくした後で、栞奈はフェリシアーノの口から出た言葉に
首をかしげた。

「そういえば、このこと言ってなかったんじゃねえか？」

「確かに。あのね、フイオーネルっていうのは、空の上にある楽園
なんだよ。このスケッチブックを全部絵で埋めると、そこに行ける
って爺ちゃんが言ってた。しかもその絵は、この世界の色々な場所
の絵じゃないと駄目なんだって」

フェリシアーノが声を弾ませて、一冊のスケッチブックを見せる。

濡れた際に濡れたのか、それは水浸しだった。

「これが？失礼ですが、特別な物には見えないですね」

「だろ？魔法とか楽園とか、嘘臭い要素ありすぎだ」

栞奈が怪訝そうな顔を見ると、ロヴィーノもそれに続いた。

「そうかな……でも爺ちゃんは平気で嘘つくような人じゃなかつた
よ？それに楽園の話は、結構色々な人が言ってるじゃん」

「まあ、確かにそうだけだよ……」

兄弟の話によれば、そのスケッチブックは最近、彼の祖父の遺品と
して見つかったらしい。そして祖父からの手紙が挟まっており、ス

ケッチブックの秘密や楽園について触れられていたとのことだ。また、フィオーネルは昔から、あらゆる人々の間で語り継がれてきた伝承でもあるらしい。

「私もフィオーネル探し、お手伝いいたします」

話を聞き終えると、栞奈がフェリシアーノに笑いかけた。

「本当！？やったあ！」

「本気か！？ただのお伽話かもしれねえんだぞ？」

それを聞くとフェリシアーノは飛び上がって喜び、ロヴィーノは表情を険しくする。兄弟なのに対照的だと栞奈は思った。

「あるのか分からない、ないかもしれない、という位の方がそられるものですよ。本当の意味で冒険になりそうですね」

そう言っただけで微笑んだ栞奈に、ロヴィーノはそれ以上何も言えなかった。

「じゃあ、早速俺達と行こうよ！」

フェリシアーノが栞奈の手を引くが、

「ちょっと待て。乗ってきた船ぶっ壊れただろうがコノヤロー」

「ヴェー！？そうだったよどうしよー！」

ロヴィーノの言葉に慌てふためいてしまった。

「大丈夫ですよ、皆に頼めば直してくれるはずですから……それに、少し待つてください。耀様と菊様にこのことを伝えなければ」

「あ、あいつらに言うのか？」

「許してくれるかなあ？だって国の外に出ちゃ駄目って言ったの菊っつて人でしょ！？」

「確かに菊様は、快く思わないでしょう。でも私は退きませんよ。

お二人が私の心を決めてくださっただんですから」

ロヴィーノとフェリシアーノは不安そうな表情をしたが、栞奈の目

には強い決意がこもっていた。

「それに、お二人が私を受け入れてくださるのならば、安心して話しに行けます」

百華国の奥に、背丈二メートル程の黄色い菊の花と赤い牡丹の花が咲き誇る場所がある。ここに百華国の長王耀と、副長の本田菊がいるのだ。

「そ、外に出るですって!?!しかもあるかも分からない楽園探しの冒険なんて……あれ程外の世界や人間は危険だと昔から……!!」
栞奈が話を切り出すと、やはり菊に猛反対された。そんな彼を耀がなだめている。栞奈は耀様、と耀の方を真っ直ぐに見つめた。

「外に出てはいけないという掟があることは、重々承知しております。しかし私は、それでも外に出たいのです。このお二人と一緒に行きたいのです」

すると耀は栞奈の目をじつと見つめてから、衝撃的な一言を発した。

「別にそんな掟、ねーあるよ?」

耀の言葉に、栞奈とヴァルガス兄弟は黙り込んでしまった。

「それは掟なんかじゃなく、菊が言い出したことある。昔は菊も、そんな考えじゃなかったあるよ」

「……しかし、彼女が死んだのは……!」

「やめるよろし、菊。お前一人の過去で他人を縛り付けるんじゃないある」

なおも反論しようとする菊を、耀が厳しい表情で睨み付ける。それ

を見て菊は口をつぐんだ。

「栞奈、これでお前を縛る物は何もなくなった……ここでもう一度聞くある。菊の言うことも少しは合っている、外には百華国の民の力を狙う人間も少なくない、危険もいっぱいある。それでも本当に行きたいあるか？」

真剣な表情で尋ねてきた耀に、栞奈は黙って頷く。

「余計な心配すんじゃないよ。俺だって栞奈が守ってやるんだよコンチクショウ！」

するとロヴィーノが急に大声でそう言った。その頬は少し赤らんでいる。

「兄ちゃんだけじゃないよ。俺だって栞奈のこと守るよ！」

フェリシアーノもそれに続き、そんな兄弟を見た栞奈の口元が緩む。

「……心配はなさそうあるな。栞奈、気をつけて行ってくるよろし」
耀は三人を見て、表情を和らげた。

旅立ちと初めての気持ち(前書き)

ようやく三人が百華国から出ます。

旅立ちと初めての気持ち

ロヴィーノとフェリシアーノはそれから、精霊達が船を直している間、百華国に滞在した。

一晩も経つと、二人の乗ってきた船はすっかり直っていた。あんなにぼろぼろだったのが嘘みたいだ。

「うわ、すごい！皆ありがとう！」

「どうぞだぜ、俺達の手にかかればこんな朝飯前なんだぜ！」

「ていうか、勇洙特に何もしてなかったのな？」

「ほとんど菊殿や耀殿のおかげだろう」

目を輝かせて喜ぶフェリシアーノに勇洙が胸を張って答えるが、燎海とリヤンに一喝されてしまう。栞奈はそんな彼等を笑って見つめていたが、

「……それでは、行ってきます」

どこか寂しそうにそう言って、見送りに駆け付けた精霊達の方を見た。

「体には気をつけるのですよ」

「お土産話、楽しみにしてますね」

緑星とリクが優しく語りかける。

「栞奈に変なことしたら、ただじゃおかないんだぜ！」

「まあ、二人とも勇洙よりは安全そうだから、仲良くやってくれるな？」

「ロヴィーノとフェリシアーノだったか、栞奈をよろしく頼む」

「冒険頑張るんだヨ！」

他の精霊達からも、栞奈だけでなくヴァルガス兄弟にもあらゆる言葉が贈られた。

「何かあったら、すぐ『水鏡』で連絡するのですよ」

今度は菊が歩み寄ってきた。水鏡とはさっき菊が栞奈に渡した透明

な丸い鏡で、外界と百華国の連絡手段、時には移動手段にもなるのだ。

「菊は心配性あるな……我から言うことはもう何もねーある。早く行くよろし」

その隣では耀が苦笑していた。栞奈は彼の言葉を聞くと、ヴァルガス兄弟と共にゆっくりと船に乗り込んだ。

そして三人を乗せた船は、朝陽で白く光っている海を進んでいき、ついには見えなくなった。

「大丈夫でしょうか、本当に」

菊は不安そうに、朝陽に照らされる海を見ていた。

「大丈夫あるよ、彼女なら。さ、仕事に戻るある」

そんな菊を耀が促し、二人で自分達の場所へ戻っていく。

「ついに行ったあるか。お前ならいつか言い出すと思ってたあるよ……そして、本当に成し遂げてしまっても」

途中で立ち止まった耀のそんな呟きは、誰の耳にも入らなかった。

この気持ちは、何なのだろう。

船に揺られながら、ロヴィーノはそんなことを考えていた。

さつき、否出会って少し時間が経ってからだ。彼は栞奈の目をまともに見られない。目が合うと何故か顔が熱くなり、恥ずかしささえ感じる。

多分、昨日彼女に抱きしめられた時からだ。

だがこれは、決して悪い感情ではない、それも彼には分かっていた。彼女を見つめていると、彼女のことを考えると、胸が苦しく、しかし温かくもなる。

だからロヴィーノは、あんなことを言った。

栞奈は俺が守ってやる。

「ロヴィーノさん、どうしたんですか？」

「あ、いや何でもない……」

栞奈が気遣わしげに、黙り込んでいたロヴィーノに声をかけてきた時、彼の心臓は高鳴った。

彼はフェリシアーノとの雑談に戻った栞奈を見ながら、自分も弟のように彼女と話せたら、という悔しさを覚えた。

この気持ちを説明する術を、今のロヴィーノは持たない。

その答えが出るのは、もう少し先のことである。

新しい家と仲間達（前書き）

メイン六人がここで揃います。

新しい家と仲間達

三人がフロアの港に船を付けた時、すっかり日が暮れていた。船を降りると兄弟が栞奈を二人の家まで案内してくれた。

しばらく歩くと山道に入り、一軒の建物が見えた。二階建の白い壁と青い屋根の家で、少々年季が入っている。

「俺も兄ちゃんも、普段はここで暮らしてるんだ。皆と一緒に」「皆、とはお父様やお母様ですか？」

「いや、違う。爺ちゃんの知り合いの息子とその周りの奴等だ。俺達はじいちゃんしか身寄りがなかったから、その知り合いに引き取られたんだ」

「皆とは兄弟みたいに育ったんだ。ギルもルートもローデリヒさんもエリザさんも、いい人だよー」

「前に名前が出た方々ですね。はやくお会いしたいです」
そんな会話をしながら、フェリシアーノがドアを開けて中に入った時だった。

「ロヴィーノ！フェリシアーノ！全く貴方（お前）という人（奴）は！ー！」

長身の男が二人、大声で怒鳴った。片方は巻き毛のある黒い短髪に眼鏡をかけた青年で、もう片方はオールバックにした金髪に水色の瞳をした体格のいい青年だった。

「三日も連絡をよこさないで、私達に心配をかけるとは……このお馬鹿さんが！」

「海では凶暴な魔物が暴れていると聞いて、俺も皆も心配してたんだぞー！」

「ヴェー！？ご、ごめんなさいー！何でもするからぶたないでー！」

「いきなり怒鳴るとか怖えんだよチクショーが！」

「あ、お二人は実は……」

栞奈は兄弟と青年達の間に入り、必死に事情を説明した。

「そ、そうか……お前が二人を助けてくれたのか」

話を聞いて、金髪の青年ルートヴィヒが少し驚いた顔をする。

「ならば貴方に、お礼を申し上げなければいけませんね」

黒髪の青年ローデリヒが、栞奈に穏やかな表情を見せる。

「それで、栞奈もこの家に住まわせてくれないかな？これから一緒に、色々な所に行くからさ」

「何でもやりますから、どうかよろしくお願いします」

フェリシアーノの頼みに、栞奈も続いて頭を下げる。

「恩人を無下に扱うわけにもいかなからな。俺は別に構わんぞ」

「まあ、部屋の空きは結構ありますからね。私はいいですよ。きつとエリザベータもギルベルトも反対しないでしょう」

ルートヴィヒとローデリヒは、栞奈を無事に受け入れてくれた。

「フェリちゃん、ロヴィちゃん！」

「おー、やっと帰ってきたのか！心配してたぞ！」

その時、五人の元に二人の人物がやって来た。緩くウェーブのかかった茶色の長髪をした女性と、銀色の短髪に赤い瞳をした青年だ。

栞奈を見て二人が怪訝そうな表情をしたので、彼女はまた事情を話した。

「勿論大歓迎よ！こんな可愛い子が家に来るなんて……色々準備が必要ね！」

「フェリちゃん達も隅に置けねえなあ、おい」

茶髪の女性エリザベータと銀髪の青年ギルベルトは、声を弾ませた。

「早速、この家案内してあげるわ！その前に着替えた方がいいかしらね……その服じゃ動きづらいでしょう？」

エリザベータは、少々混乱気味の栞奈の手を引いて、家の中に入っていく。

「元気がいいですね……全く」

ローデリヒはそんなエリザベータを、溜め息混じりに笑って見つめていた。

「栞奈にはこの部屋を使って貰うわ。家具とかは少しずつ揃えていくから安心してね」

エリザベータが栞奈の前に出、色々と言明してくれる。彼女の説明に耳を傾けている栞奈は元々着ていた浴衣ではなく、エリザベータのお古の白いレースつきロングワンピースを着ていた。

「ところでこの家には、皆さん以外の人はいないんですか？お屋敷っていうとたくさん人がいると思ってたんですが」

「基本的にそうね。ここはローデリヒさんの家の古い別荘で、お屋敷は別にあるから。フェリちゃんもロヴィちゃんも、ある時期からお屋敷よりこっちで長い時間を過ごしてるの。ギルやルートちゃんや他の友達と遊んだりしてね……」

エリザベータの表情が一瞬曇ったのが気になったが、栞奈はそれを口に出さなかった。

それからエリザベータは、自分の使っていた小物や服を栞奈にたくさんくれ、色々とよくしてくれた。

「ん……」

窓から差し込む朝日で、栞奈は目を覚ます。ベッドの両側を見ると、ロヴィーノとフェリシアーノが寝息を立てていた。しばらくは起きそうにない。

家具等が一通り揃うまではヴァルガス兄弟の部屋を使わせてもらうことになったが、朝起きたら隣に異性がいるという環境はかなり新鮮だった。

(今日から私も、ここの一員なんですね……)

兄弟を起こさないようにベッドから立ち上がり、部屋の中を歩いてみる。

そんな時、勉強机の上にある、開きっぱなしのフェリシアーノのスケッチブックが目に入った。所々ふやけたページに鉛筆で、何かが描かれている。

「これって……!」

そこに描かれていたのは、黒い長髪をなびかせる女性、琴奈だったのだ。さらにその周りには、あらゆる種類の花が描かれていた。

(私が、このスケッチブックのページ目を飾っていいんですかね……)

まだ何の色もついていない絵を見て、琴奈は驚きつつも嬉しくなってきた。

新しい家と仲間達（後書き）

一章はここまで。次はキャラクター紹介書く予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2381y/>

夢色冒険譚～ココロのファンタジー～

2012年1月2日09時49分発行